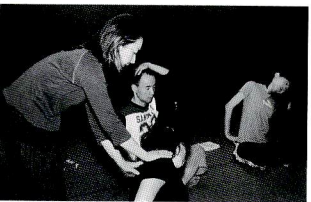




2006年、熱田神宮能楽殿で演じた「花月」より。この厳肅な雰囲気を見るに、装束と面を身にまとったとき「40%は力を取られる」ほど疲労するものも、さもありなん。ちなみに、旦那様は金剛流能楽師の宇高竜成氏



京町家ステイで知られる「庵」が開催している、外国人高校生に向けた「アートプログラム」にて、お茶や書道、能狂言・日本の伝統文化を再発見するプログラムこそ、「日本の高校生に体験してほしい」と春奈さん



アトリエ劇研の「アクターズラボ」にて。全12回のクラスで、それぞれ生徒がひとつの作品をつくる。バックエクササイズの後、方法にいくつか制約を与え、各自が個性を活かした表現を見つけるためにサポート

能楽師

田中春奈

TANAKA HARUNA

【プロフィール】大学進学後、米・仏にてトーマス・リブハート氏に師事し、コーポラルマイムを5年間研究。その間、米国ピッツァー大学にて文学士号（ムーブメントシアター）取得。'05年京都造形芸術大学大学院にて、芸術修士号（舞台芸術）取得。'98年より、能楽金剛流宇高通成師に師事。'04年師範免状取得。現在、金剛流能楽師シテ方。社団法人能楽協会所属。

京 KYOTIAN I.D.
京のおきばりさん

取材・文／山田涼子 撮影／木村有希 (Visual Cafe)

流れているようで、その実 確実に選び取っている「いま」

「これほど無駄なく経験やつながりを利用できるのは、持って生まれた才ではないか。院時代の作品ばかり、金剛流の宇高通成氏に弟子入りしたことで旦那様に出会い、その結婚式で「庵」の社長から通訳を頼まれる。その実、彼女の本業は何か。「肩書きをあえて名乗ってない」のは、能楽師としても「駆け出しのペーペー」（本人談）であり、「学んだ英語を活かし、日本文化を伝えるお手伝いができた」という思いで引き受けた通訳であり、講師に至っては「自分が研究してきたことが学生たちの未来選択に少しでも良い影響を与え、彼らから刺激を受けることができれば面白い」のではないかと思っただけ。更に、「金剛流能楽師の妻」も肩書きというには、いささか抵抗があるだろう。肩書きを持たずにいる姿勢は、日本人特有の遠慮や控えめといった要素よりも、研鑽に対する意欲ゆえに見受けられる。「どれもまだまだ、これからだ」と、己に発破をかける意味で。

彼女が「演劇」に出会ったのは留学先の大学。何となく「学ぶなら本場」に興味があった。「学ぶなら本場」と渡米。それまで語学留学を考えたこともなかったため、「最初の一年は鼻血が出るくらい勉強した」とか。しかし、誤算だったのは人気のフィルムクラスが定員オーバーで履修できなかったこと。仕方なく、少しでも関連性のあるものを：と、選んだのが演劇だった。

先の大衆。何となく「学ぶなら本場」に興味があった。「学ぶなら本場」と渡米。それまで語学留学を考えたこともなかったため、「最初の一年は鼻血が出るくらい勉強した」とか。しかし、誤算だったのは人気のフィルムクラスが定員オーバーで履修できなかったこと。仕方なく、少しでも関連性のあるものを：と、選んだのが演劇だった。

そのタイムマインドを眺めているだけではなく触ってみたくなるとしても不思議はない。そうして彼女は、「能楽師」と名乗れる立場になった。女流能楽師は確かに増えてきてはいるが、正直やはり男社会。その隙間産業を狙えるだけの度量が、彼女には備わっているに違いない。

失礼ながら、これほど無駄なく経験やつながりを利用できるのは、持って生まれた才ではないか。院時代の作品ばかり、金剛流の宇高通成氏に弟子入りしたことで旦那様に出会い、その結婚式で「庵」の社長から通訳を頼まれる。その実、彼女の本業は何か。「肩書きをあえて名乗ってない」のは、能楽師としても「駆け出しのペーペー」（本人談）であり、「学んだ英語を活かし、日本文化を伝えるお手伝いができた」という思いで引き受けた通訳であり、講師に至っては「自分が研究してきたことが学生たちの未来選択に少しでも良い影響を与え、彼らから刺激を受けることができれば面白い」のではないかと思っただけ。更に、「金剛流能楽師の妻」も肩書きというには、いささか抵抗があるだろう。肩書きを持たずにいる姿勢は、日本人特有の遠慮や控えめといった要素よりも、研鑽に対する意欲ゆえに見受けられる。「どれもまだまだ、これからだ」と、己に発破をかける意味で。

コーポラルマイムを専攻したのは、後に恩師の作品を観て、衝撃が走ったから。「興奮して言葉が出てこなくて、とにかく好きでした！」と伝えたいのです。すると、彼はひとこと「Tony Brown」と笑った。そうか、自分にもできるのか。ならばやってみよう。ここで役立ったもののひとつとして、意外にも幼少のころ嗜んだ書道。ブラジル人の友人に、「ハルナのリズムはどうやってるの？」と聞かれ、改めて考えこんで、「呼吸が書道そのものであってことに気づいたんです。グツとためて、スッと払う、みたいな。在学中、とくに「制約の上になり立つ美」に惹かれ、各国の古典芸能を学術的に学ぶ。とりわけ魅せられたのは、「能」。母国の代表的な伝承芸能だった。

「失礼ながら、これほど無駄なく経験やつながりを利用できるのは、持って生まれた才ではないか。院時代の作品ばかり、金剛流の宇高通成氏に弟子入りしたことで旦那様に出会い、その結婚式で「庵」の社長から通訳を頼まれる。その実、彼女の本業は何か。「肩書きをあえて名乗ってない」のは、能楽師としても「駆け出しのペーペー」（本人談）であり、「学んだ英語を活かし、日本文化を伝えるお手伝いができた」という思いで引き受けた通訳であり、講師に至っては「自分が研究してきたことが学生たちの未来選択に少しでも良い影響を与え、彼らから刺激を受けることができれば面白い」のではないかと思っただけ。更に、「金剛流能楽師の妻」も肩書きというには、いささか抵抗があるだろう。肩書きを持たずにいる姿勢は、日本人特有の遠慮や控えめといった要素よりも、研鑽に対する意欲ゆえに見受けられる。「どれもまだまだ、これからだ」と、己に発破をかける意味で。

フィルムアメリカで渡米したのは、能日本でも来日、いや帰国するは当然のこと。もちろん、伝統芸能に京都だ。彼女は能の魅力も、「他に類を見ない、演劇界のタイムマインド」だと言う。「伝承だけでこれだけの長い歴史を重ねてきた芸能は、世界でも類を見ない。能はたくさん可能性と学術的な価値がある」と。

そのタイムマインドを眺めているだけではなく触ってみたくなるとしても不思議はない。そうして彼女は、「能楽師」と名乗れる立場になった。女流能楽師は確かに増えてきてはいるが、正直やはり男社会。その隙間産業を狙えるだけの度量が、彼女には備わっているに違いない。

そのタイムマインドを眺めているだけではなく触ってみたくなるとしても不思議はない。そうして彼女は、「能楽師」と名乗れる立場になった。女流能楽師は確かに増えてきてはいるが、正直やはり男社会。その隙間産業を狙えるだけの度量が、彼女には備わっているに違いない。

Information

「名古屋能楽堂九月定期公演 初秋能」
平成20年9月7日 於：名古屋能楽堂 第二部 午後二時開演
金剛流 仕舞「杜若キリ」 シテ 田中春奈

「解体The船弁慶」
（能と能面・実演・体験ワークショップ）

京都：9月27日（土）14:00～17:30
東京：10月13日（月・祝）14:00～17:30
<http://kyoto.coolne.jp/tatsushige/>

「庵 オリジン・アートプログラム」
<http://www.kyoto-machiya.com/culture/index.html>

「アトリエ劇研 アクターズラボ」
<http://www.gekken.net/>